

キャラクター名
藤林 悠香 (ふじばやし ゆうか)

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ		ワークス	UGNエージェントB	カヴァー	高校生
	モルフェウス					
オプション			年齢	17	性別	女
覚醒	犠牲	衝動	自傷	初期侵食率	36	%
出自	姉妹	経験	殺傷	邂逅	借り	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	27
肉体	3	0	0			3	行動値	13
感覚	3	1	2			6	(非装備時)	13
精神	1	0	0			1	戦闘移動	18
社会	1	0	0			1	全力移動	36

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	6		RC	1		交渉		
回避			知覚	1		意志	1	1	調達	5	
運転:			芸術:			知識:			情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
ハンドレッドガンズ	射撃	6r+6	-	9		マイナーで作成
真紅の弾丸 (レッド・パレット)	射撃	9r+9	-	9		侵食率+4、ダメージ+1D

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ
祈りの造花		8			ハンドレッドガンズを5レベルで取得

所持品	
サイドリール	
コネ: 要人への貸し	
コネ: UGN幹部	
手配師	
思い出の一品	
メモリー: 元クラスメイト「牧岡 零二」	

合計装甲: 8 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
Dロイス: 無形の怪物(アバター)	P	N		
Dロイス: 遺産継承者	P	N		
妹: 藤林 愛花	P 庇護	N 不安		
落ち着いて: 古桐 英治	P 好奇心	N 憤懣		
頼りになる支部長: 黒星 名井	P 信頼	N 恐怖		
死んだと思ってた...: 牧岡 零二	P 幸福感	N 隔意		
黒衣の怪物	P 有為	N 憐憫		

最大財産P: 12 残り財産P: 7

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
コンセントレイト: mo	2	2	メジャー	-	-	シンドローム	-	
効果: C値-LV(下限値7)								
カスタマイズ	3	2	メジャー	武器	-	白兵/射撃	-	
効果: 判定ダイス+LV個								
剣精の手	1	2	オート	至近	自身	自動	リミット	
効果: ↑の判定時に使用、判定ダイスを1つ10に変更する。シナリオ[LV+1]回								
ハンドレッドガンズ	5	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果: 武器を作成する								
バリアクラッカー	2	4	メジャー	武器	-	兵/射撃	80%	
効果: 攻撃に対してガードを行えず、装甲値を無視する。シナリオLV回								
セキュリティカット	1	1	メジャー	至近	効果参照	自動	-	
効果: セキュリティを解除する。必要なら<知覚>か<RC>で判定								
万能器具	1	-	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果: 日用品を作り出す								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

2年前の、学校の帰り道。それが私が初めてジャームに遭遇した日。その頃は普通の学生だったから、何が起きたかなんかさっぱり分からなかったけど、とにかく凄い怖くて、でもどうしてか体は全然動かなくて……そんな理解できない状況の中だったのに、どうしてか頭の片隅で「あ、私死ぬんだな」って、凄く落ち着いた自分がそう言っていたのだけは、今でも覚えてる。……でも、私は死ななかった。その前にあいつが来たから。

牧岡零二。高校からのクラスメイトで、まあそれなりに話したこともあったと思う。なんか頼りなさそうな優男って感じだったけど、だからこそ話しやすいついでいうか。そんなやつが、私の目の前で怪物と戦ってて。夢かと思ったけど、息苦しさで2人がぶつかり合う迫力で、嫌でも現実には引き戻された。……そこから先の事は、正直あんまり覚えてない。動きが早すぎて目で追えなかったって言うのもあるし、色々混乱がピークだったのもあるし。何か叫んだような気もしたけど、それもよく覚えてないわ。……次に記憶がはっきりしたのは、あいつとジャームが刺し違えた瞬間の、真っ赤な風景と血の匂いだった。

あたしを襲った化け物……ジャームが動かなくなったら、私の体も動くようになった。ただワーディングが切れただけなんだけど、その頃の私はそんな事知らずにただあいつの傍に駆け寄るだけで精いっぱいだった。真っ赤に濡れて横たわるあいつは、あたしが見てももう助からないだろうなって分かって……そんな中で、あいつは最後に笑ったわ。まるで「君が生きてよかった」とも言いたげにね。その直後、あいつの体は光になって、近くに転がってたあいつの武器……日本刀の中に吸い込まれていった。私はその刀を、なんとなく手に取って……気付いた時には、私は知らない人達に囲まれて、手に取った刀はいつの間にか銃の形に変わってたわ。

その後は、知らない人達……UGNの人からオーヴァードになった事とか、この銃が遺産って呼ばれるものとか、あいつがUGNチルドレンっていうのだったとか、色々聞かされて……最終的に、私が自分でエージェントになるのを選んだ。ただそれだけの話よ。決めた理由は、半分はそうしない私が納得できないから。もう半分は……そうね、死んだ奴への八つ当たりってとこかしら。……我ながら、言葉にすると中々酷い理由よね、これ。

ま、そんな感じで高校生しながらUGNのエージェントをやってるから、どこかで会ったらよろしくね。……あ、そうだ。今のうちにこれだけは言っておくわ。私、自己犠牲って大嫌いだからそのつもりで。